

Essay

Sapiarc.com

2013年6月26日(2013-6)

自分の時間の使い方について

時間というものは、考えると難しいもので、昔から哲学者がいろいろと議論してきたようだ。それはともかくとして、確かに言えることは、時間ほど誰にでも平等に与えられているものはないということだ。また、時間はお金では買えないものだ。忙しい人は、お金を出して人を雇うことができるので、うまくいけば非常に良い代替品になる人を手に入れることはできるかもしれない。しかし、時間自体を手に入れることはできない。

昔の権力者は、不老長寿の仙薬を探すことで、時間を手に入れようとした。最も有名なのは、秦の始皇帝の例だろう。しかし、もちろん不成功に終わって、始皇帝は60歳になるかならないかぐらいで死んだはずだ。今なら、もっと長く生きることができただろう。

誰でも同じような感じを持っているのではないかと思うのだが、子供のときには、時間の経つのが長く感じられた。つまり、1年は相当長い期間だったと思う。学生時代でも、まだ時間は相当長かったように思う。現代は忙しい時代になっているので、今の学生は、そんなことはないと言うかもしれないが、私は、大学院を終えるまでの1年間はある程度長いものと感じていた。だから、学部卒業後大学院で5年間も過ごさないと博士の学位をもらうことができないということには、相当な抵抗感を持っていた。今では、早期学位取得の制度があるので、私の知っている範囲では、4年半ぐらいで学位を取得した例はある。全国的に見た場合、早期学位取得者がどれぐらい出ているのかは知らない。

私の今の関心事は、当然のことながら、自分がこれからどのように時間を使うのが一番良いかということだ。若いときと根本的に違うのは、時間が経つのが恐ろしいぐらい速く感じられることだ。しかも年々その感覚が強まっていて、1年があつという間に過ぎていく。

そういうなかでの時間の良い使い方を考えると、結局いろいろなことに気を使ったりせずに、自分が本当にしたいことだけをするのが一番良いところに行きつく。今の私が自分勝手な生き方をしたからといって、誰か他の人に迷惑がかかる可能性はほとんどなくなっている。それは、ある意味では自分自身にとって寂しいことでもあるのだが、むしろそういう状況を十分に認識して利用すべきだと思う。

私は今、昨年編集し、自分も書いて出版した「赤外分光測定法」の英文版を作成することにかかりきりになっている。日本語版はA4判2段組で200ページという、相当大部なものだから、これと全く同じものではないにしても英文版の作成は、予想を遥かに超える難事業になっている。元々英文原稿は私が書くことになっている章が多いこともあって、80%以上は私が原稿を書いて、著者がチェックし、それを専門の近いイギリス人に送り、英文の手直しをしてもらう。このイギリス人は、相当数の本の編集に関わったので、こういうことには慣れていて、英文の適切な手直しをしてくれる。本当にありがたいことだ。

この仕事は大変なことなのだが、イギリスの出版社 Wiley 社と今年の終わりまでに仕上げるという契約を結んでいるので、遮二無二進めている。というのも、この分野で日本人 10 数人だけで英文の教科書(的な)本を書くというのは空前のことであり、おそらく絶後になるに違いない。だから、内容的にはもちろんのこと、英文表現も native のアメリカ人やイギリス人に違和感のないものにしたいと願っている。

この本が出版された後どうするかは、ずっと考えてきた。結論としては、初心に戻って、分子振動というものを十分理解できたと思えるまで研究することを中心に、いろいろ勉強したいと思っている。分子振動というと、何のことかわからない人たちが多いのは当然だが、私がずっと専門にしてきた赤外分光学やラマン分光学と切っても切れない関係にあるもので、分子というものが持っている基本的な性質である。本来これを研究することこそが私の専門なのだが、これまでは、ある近似に基づく理論体系に依ってきた。その近似は良い近似なので、赤外スペクトルやラマンスペクトルは大抵その近似で解析できる。しかし、近似はあくまで近似である。

コンピューターの信じられないような高速化と量子化学理論の進歩もあって、今では、これまでの近似ではなく、もっと高い近似の下で、分子振動を扱うことが可能になっている。私は、コンピューターをこの分野で最初に使った人たちのうちのひとりだった。正確に言えば、最初に使った少数の人たちの直ぐ後に続いていた。したがって、初期のコンピューターも知っているし、自分で少なくとも 4 種類のコンピューター言語でプログラムを書いた経験がある。しかし、それは 40 年以上前のことで、書いたプログラムは当時の大型計算機用のものだ。

パソコンを自分で書いたプログラムで動かしたことは、これまでにないが、初心に戻って、そういうこともしたいと思っている。しかし、昔とは違って、自分がしたい計算のプログラムを全部自分で書き上げるという時代ではなくなっている。既存のプログラムとの結合、他の人が作ったプログラムを使わせてもらうことも必

要だろう。また、今のところ聞いたことはないが、科学計算にもクラウドコンピューティングを使うということも可能になるのかもしれない。そのあたりは、来年になってから見極めたいと思っている。

そういうわけで、自分がしたいことの方向性は見えているのだが、果たして、どこまでできるかは、やってみないとわからない。頭はまだ大丈夫だと思っているが、体の方はやはり年々歳を感じている。80 歳でエヴェレスト登頂を果たした人もいるので、頑張りたいとは思いますが、どうなるかは簡単に予想できることではない。

いろいろな計算などをやってみて、案外何か面白いことがわかったら、どうするか？ 普通は論文にするのだが、そこまでするかどうか、迷っている。論文を発表するには、いろいろ面倒な手続きを経なければならない。それは、私がしたいと思っていることと、場合によっては、かなり異なる状況を作り出す可能性があるからだ。

昔のイギリスの有名な物理学者・化学者キャヴェンディッシュ(Henry Cavendish, 1731-1810) は、優れた研究をたくさんしたが、発表はしなかったそうだ。彼がした研究は、彼の死後に発見されて、それらが時代に先駆けたものだったことがわかったのだ。彼自身は他人との付き合いをまったくせず、自分のしたい研究に没頭していたようだ。そういうことができたのは、彼が裕福な貴族で、ケンブリッジ大学で学んだが、大学教授として研究したわけではなく、自分の邸宅内に研究室や実験室を持っていて、そこで研究していたからだ。

私はキャヴェンディッシュのように裕福ではないが、暫くの間だけでも、二百年以上前に生きた、この人の真似をして暮らせないものかと思っている。(おわり)